

---

2020年8月

真宗大谷派 京都教区 教化広報誌

# 教区だより

## 特別号

Vol.4

---

「今、この時に、親鸞聖人に会う」

「“私”を生きる」

光闡坊住持 さの佐野 あきひろ明弘氏

◎『教区だより』特別号 について

新型コロナウイルスの感染拡大の影響により、『教区だより』は通常の編集体制が取れなくなったため、5月より京都教務所の編集責任により、「特別号」を発行しております。

通常 of 体制に戻るまでの間、引き続き特別号というかたちで発行してまいりますので、教区の皆様には、ご理解いただきますようお願いいたします。

『教区だより』特別号の発行について

新型コロナウイルスの猛威が世界中を不安に陥れ、私たちの日本社会も計り知れない不安の只中にあります。

これまで「当たり前」にしていたことが当たり前ではなくなつた現実に向直し、あらためて考えさせられること、気づかされることも多々あるのではないかと思います。

私たちが当たり前にしてきた「日常」とは、実はどこにも約束されていない奇跡の連続であり、また人間の自我分別が思い描く理想は、常に事実の前に屈服せざるを得ないという道理も教えられます。

いま、私たちは早期の事態終息を深く願ひながらも、このような時だからこそ、浄土真実を宗とする宗祖親鸞聖人の教えに身をさらし、聖人の教えに出会い直していくことが大切ではないかと思ひます。

このような願ひから、京都教務所では「今、この時に、親鸞聖人に会う」というテーマのもと、『教区だより』特別号を発行してまいります。

京都教区教化委員長 日野 隆文

「今、この時に、親鸞聖人に会う」

「私」を生きる」

光闡坊住持 佐野 明弘

“私”とは何か

「今」とはどんな時でしょうか。人は常にどんな時も時代を問い、歴史を問い、社会を問い、自らを問うてきました。こうして、問い続けるというところには根本的に問わずにはおれないようなものを人間の自我意識が抱えているというところなのでしょう。このところを少し考えてみたいと思ひます。

自我意識というのは簡単に言えば“私”という思ひです。私たちはいつから問い始めたのかといえ、この“私”という思ひが自らの心に目覚めたときからです。そして、同時に問わずにはおれない問題にも目覚めたと言うことができます。この“私”をよくよく尋ねてみると、とても底の知れないような恐ろしい孤独を抱えているではありませんか。そればかりではありません。こうして日々一生懸命にやっていることも、ずっと大事にしてきた人生も死がやってくるすべてが奪い去られてしまう。しかも、自分の思ひや願ひよりも死はまったく確かなことですから受け止めるよりほかありません。そ

れが耐え切れず淋しいことですし、深く人生のはかなさを思わずにはおれません。

又、そのことはさらに、それではいったい何のために、何故生まれてここに居るのか、自分で望んだのか望まれたのか、自分の存在の根拠すらがわからないのです。にもかかわらず、ただひたすらに生きんとする欲求がつきあびてくる。これは不条理というものではないのか。こうして“私”は様々なものを抱えて、この世界という場と時間の流れの中に放り投げだされたようにして“私”として目覚めるのです。

いつから“私”？

もう少し、確かめてみましょう。例えば、「いつからあなたはあなたを生きていますか？」と訊かれると、たいていの方は「生まれたときからです」と答えられます。「ではいつ生まれましたか」と訊くと、これもたいてい誕生日を答えられます。でも、おいくつですかと訊くと満々歳です、数えでは…と言われる方もおり、お母さんのおなかから出てきたのが誕生日だけれども私が生きたのは誕生よりも前にお母さんのおなかに命が宿った時からだ、と言われます。これには「生まれたときからです」と答えられた方も賛同されます。ただ、「その時からあなたはあなたを生きてきたのですか？」

と少々変わった質問をすると、怪訝けげんそうな顔をされて「そうですか」などと答えられます。それで、問い詰めるように尋ねていくとほとんどの方が受精卵が着床した時のことは勿論、生まれた時のことも覚えておられないのです。

私も自分の誕生日のことは事実として受け止めていましたが、よく考えてみると全く覚えていませんし、それが後から得た情報であるということにすら気づいていませんでした。情報にまちがいがなく、事実であったとしても「私」にとっては確かめようがありません。何故なら、実は「私」はその時はまだいなかったからです。もっと丁寧に言うと「私」という意識はその時はまだ活動するほど熟していなかったのです。

このように、「私」とは気づきとしてあり、今も気づきつつあるのです。ですから、「いつからあなたはあなたを生きていますか？」と訊かれれば「気づいたときからです」ということになります。私などは五歳の頃からの記憶しかありませんが、たぶんその頃自我意識が形成されたのでしょうか。早い人は二歳頃とか、稀まれには胎児の頃の記憶やそれ以前の記憶を持つ方もおられます。もしそれがその方の本当の経験的記憶であるなら、その方はその時から「私」を生きてきたのです。

ここまでできてわかることは、「私」が生きて

いるのではなく、生きていることに気づいている意識が「私」であるということです。このことは仏教においては、意識とは第六番目の感覚器官「意根いこん」の活動状態であると説かれてきたこととです。

### 「いのち」というはたらき

それでは、「私」以前には何が生きていたのでしょうか。生きようとする、在ろうとする。ことよって世界や時間が展開するその意欲とはたらきを仮に「いのち」と言うならば、私たちは「私」が生きているのではなく「いのち」が私たちを生きている。そして、その生きているということに気づいたのが「私」ということになります。生きようとする意欲を「いのち」と言っておいて「いのちが生きる」では同語反復のようですが、他に言いようがありません。

「いのち」は勿論、私たちだけを生きているわけではありません、時間の始まる前からのはたらきを展開しているのです。それを時間空間という認識形式で目覚めた「私」が認識するとき、「いのち」は地球や地球のあらゆる存在（水・空気・鉱物・動植物等）、そして宇宙のあり様など多様で豊かな世界と深い時の歴史となつて「私」に受け止められる。「いのち」のはた

らきが時の始まりを超えて無限であるのですから、この「私」の気づき、目覚めもまた無限性を秘めております。「私」とはなんと深く広い「いのち」の中にあるのだろうかと思われれます。世界の多様性と歴史の深さは、強い自己中心的な自我意識の翻りひたひたというかたちで「私」を超えて「私」において気づかれ、認識されませんが、実はそのことに常に背くように自己中心的な「私」はこのことを最も嫌い、翻らないように翻らないようにと自らを確立しようとしています。ここがなんとも面白くも痛ましくもあるところではあります。

ここまで考えてきますと、「いのち」が「いのち」自身を自覚せんがために有限なる「私」、しかも「いのち」に背くような自己中心性をもった「私」とまどなつたということができるでしょう。これは、一如法界いちにほっかいが自らを一如法界においてではなく、かえって有限なる衆生の迷いの心の上に成就させて南無阿弥陀仏という姿を現す出来事と同じ法則です。また、痛ましさを如来のご苦労と頂いてきたことです。

### 大地を失っている

さて、この世界に私としてあることに気づいてしまった「私」の方に話を戻します。朝、目が覚めて「私」が活動を開始する時、先ず思う

ことは「どうしたらいいか」です。「起きようか、もう少し寝ようか。どうしようかな」から始まって、この問いは起きた時から寝る時までありとあらゆることに対して起こってきます。そして、それは「私」が目覚めてからずっと生涯にわたって常に「私」に起こってくる問いです。時間の中に目覚めるということは必然的に行動をとらなくてはならないようになっていきます。そこに「私」は「どうしたらいいか」という問いを抱えるのです。そしてそれがずっと生涯止むことがありません。

人間以外のいのちを生きるものは、皆いのちの要求通りに生きて迷いがないように見えます。竹は竹で迷いがなく、ミミズはミミズで迷いがないように見えます。人間だけがどう生きていいのかに迷うのです。人間も「私」が芽生えるまではいのちの通り「おぎゃー」と迷いなく生きておりましたが、「私」が芽生えてからは何から何までその都度その都度どうしたらいいか、どうすべきかを考えて行動を決定しなくてはなりません。「私」にとって「私」を受け止めるのは非常に骨の折れる仕事です。そこに皆困っております。

「私」には「私」を受け止めるべき確かな拠り所が何一つないのです。全ての存在が世界と全く一つであるのに対して「私」だけは世界か

ら切り離され、世界は環境として「私」以外のものとなっていきます。ですから、竹やミミズのように世界と全くひとつになって生きることは「私」にはできず、「私」は根本的に孤独です。「大地 (ground) 根拠」を失っているのです。しかし、それは「私」にとって耐えがたいことなので常につながりを求めますが、つながっていてもさえもそこに本当に通じ合うことがなかなかできず、孤独は一層深くなるばかりです。

### 老病死が問いかけるもの

そして、「私」が私を受け止めるのが難しくなる状況として真っ先にあげられるのは「老病死」でしょう。「基盤 (foundation) 根拠」となるものが全く不安定なのです。衣食住や健康など生活していく基盤が確かなものがないので、老病死は常に「私」に不安をもたらします。老病死は人間だけでなくあらゆるいのちを生きるものが皆、老病死の存在です。いのちを生きるものすべてがこの老病死を抱えているのです。しかし「私」だけがこの老病死に非常に迷うのです。老病死は「私」にとっても避けても避けられないにも関わらず、どうしても避けたい、受け入れがたいものです。今回のコロナウイルス感染の問題でも騒いで

いるのは人間、正確には「私」だけです。「私」は「人は何れ死ぬ」ということを知っています。自分も大切な人も死んでしまう。死にたくないのに死んでいかねばならない、死んでほしくないのに死なれてしまう。それは「私」には耐え難いことなのです。こうして、「私」は「私」である限り根本的に命に関する不安や孤独を抱えているのです。ですから、コロナウイルスのように強い感染力と死に至る可能性があり、治療の方法がわからないものに対して、不安は明らかな恐怖となって「私」に襲いかかってきます。

同時に、貨幣経済が非常に偏重された経済社会に生きる生活者の「私」にとっては、コロナウイルスの感染を避けることが経済生活の破綻、それはそのまま生活基盤の喪失に追い込まれ、食べていけなくなるというジレンマに陥っております。ですから、この事態に対処していくことが緊急かつ必要なのであるとされています。このように老病死に代表される苦をできるだけ遠ざけるにはどうしたらいいか、そのために科学や医療技術などを発達させてきました。しかし、どれだけ医療が発達し、科学技術が発達しても、どこまで行ってもそこにあるのはやはり、それで「どうしたらいいか」ということです。あり得るとは思えませんが(技術がそこを

目指しているように思えます)、たとえ老病死が技術的に克服され、老いることも病むこともそして死すらなくなったとしても、そこにあるのはまたしても「どうしたらいいか」ということでしょう。つまり、老病死は克服では解決しない問題があることを示しています。

## 「生」の苦しみ

十二縁起じふにえんぎでは老病死の前に「生」があります。仏法ではこれも苦ととらえます。生老病死の四苦という時に生苦を生きることの苦しみとされる向きもありますが、言語的には生は「生まれる」という意味で、生きるという意味は含まれていません。生まれた苦しみというのはわかりづらいのですが、先ず老病死やあらゆる苦の原因として生まれたということがあります。更に、死を先延ばしにするようなあり方、老病死を克服するようなあり方では解決しない問題とは、それでは生まれたということが解決しない、あるいは生まれたということが成就しないのです。

「私」にとつて生まれたということは、気づくと世界に投げ出されたようにあるので、何をしに何の為に生まれて来たのかその「理由 (reason || 根拠)」がない。そうすると老病死等の苦にどれだけ「どうしたらいいか」とかかわっても、結局その人生全体は何なの

かという問いの前には全く虚しいのです。「生」の問題は老病死に先立ってあるだけでなく、老病死を貫いてあるのです。

## 凡夫の誕生

ここまで来て、「私」とはそこを生きる大地も生活の確かな基盤も本当の存在理由も持たない、孤独と不安と虚しさを逃れることのないものであることが明らかになってきました。決して逃れることのできない孤独と不安と虚しさを根本的に抱えたもの、これが自らの根拠を持たない「浮生」なる「私」の実相であったのです。これはどうにかしてどうにかなるものではありません。「私」の意識構造そのものが抱えるものだからです。しかし、だからと言ってそのままだはおれません。誰しもがこのことに悩み苦しみがいてきました。「私」である限り、このことに悩まない者はひとりもいません。すべての「私」がそのことに困り果てています。

親鸞聖人もこのことを何とかしようと二十年もの間、仏法に全身全霊を傾けられました。しかし、どうすることも出来ませんでした。「私」が「私」をどうにかするのは自分で足を持って自分を持ち上げるようなもので、これは不可能なのです。「どうしたら」ということはここで全く行き詰ってしまいます。どうにもならない

ものを抱えたまま、それをズルズルと引きずりながら比叡山を下りられたのでしよう。そのまゝ六角堂に籠こもられてしまいます。九十五日目に夢告を受け、法然上人のところへ参り「念仏しなさい」の一言に打たれた親鸞聖人の「私」は目を覚まします。

「私」は「私」をどうにかできたのでしょうか。いいえ、そうではなく「私」が「私」をどうにかできるつもりでいたことこそが大いなる迷いであつたのです。そのことに目覚めた、凡夫の誕生です。十方三世久遠じつぱうさんぜの深さを持つて呼び掛けてきた本願に呼び覚まされてはじめて「どうしたら」という雑行を棄て、どうにもならない迷いの身に帰ることになったのです。

これは「私」の起こした欲求ではありませんでしたが、出遇ってみると、実は「どうしたら」の問いが始まるその最初から、いやそれ以前から「私」はこれにずっと遇いたかったのです。「私」からは決して求めたことのないものが「私」に起こってみると、それこそが「私」の求めていたものであつたのです。そこに得べきものを得た「慶よろこ」びがあり、「生」の成就し続けていく世界、浄土がひらかれてあつたのです。これを親鸞聖人は「往生を得る」をおっしゃつたのであります。

教務所からのお知らせ

《得度》

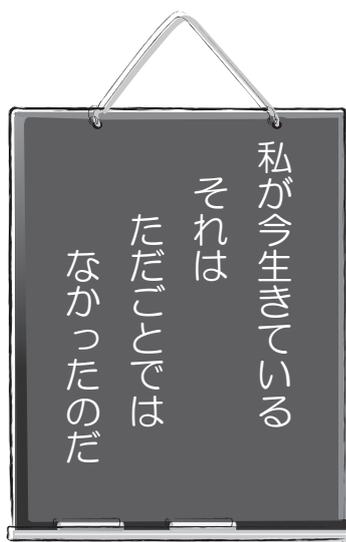
二〇二〇年六月二十三日付  
 近江第一組 榮泉寺 澤 凜華  
 近江第十一組 念称寺 藤谷 明美  
 〔敬称略〕

《住職任命》

二〇二〇年六月二十八日付  
 丹波第一組 満林寺 黄楊川 淳  
 石西組 西念寺 前田 慈史  
 〔敬称略〕

《敬弔》

ご生前のご功労を偲び、謹んで哀悼の意を表します。  
 近江第五組 正念寺前坊守 乾 久子  
 二〇二〇年六月九日 八十九歳  
 石東組 浄蓮寺前住職 能海 存  
 二〇二〇年六月十四日 七十歳  
 〔敬称略〕



※毎月掲載しております、「ことば」は、教区駐在教導が担当しています。

《教務所事務休暇のお知らせ》

夏期事務休暇として、左記の期間は教務所事務の取り扱いを休止いたします。

なお、緊急(期間中の授与物のお渡しや院号法名の申請、収骨の受付等は緊急にはあたりません)の場合は、左記連絡先にご連絡いただきますようお願いいたします。

期間  
 八月七日(金)～十六日(日)  
 緊急連絡先(教務所携帯電話)  
 〇九〇―三七一九―七九八二

駐在日記

京都教区に赴任し、娘が「せっかく京都に来たんだから〇〇寺に行きたい」と言うので、かの有名な〇〇寺に車で行き拝観料を払うと、入場券は「家内安全」「交通安全」等と書かれたお札だった。一通り歩いて帰ろうとしたら、車のエンジンがかからない！バッテリー上がりなら他の車とブースターケーブルをつなぐとかかる。ブースターは車に積んでいる。でも〇〇寺の駐車場係の人や事務所に人に「職員の方の車を隣に持ってきてくれたら自分でするので」といくら懇願しても「それはできません」(お札に「交通安全」と書いているのに)。拝観終了時間が迫っている。駐車場にいたレンタカーに乗ってる外国人観光客の人に身振り手振りで必死にお願いしてブースターをつないでもかからない。妻と娘は立ち尽くしている。困り果ててJAFに来てもらったら、原因は古くなったバッテリーの電極からほんの少し液が漏れて固着して電気が流れないからで、電極をブラシで磨くだけで復活した。▼某大手カー用品店でバッテリー交換し、「電極磨いておきました」と言われたのに、それから数日、またエンジンがかからない！近くの小さい修理屋さんに来てもらったら、バッテリー交換のとき電極の掃除をしなかったのが原因とのこと。ナニー！その修理さんは「お代はいりませんから」と帰っていった。カッコイイ！▼〇〇寺にガックリきて某大手カー用品店にガックリして、地元「密」に根をはって頑張っている修理屋さんを救われた。お寺も地元「密」な存在として、たとえソーシャルディスタンスが必要な時代にあっても、その精神は失ってはならないと感じた出来事だった。(駐在教導 谷本修)

真宗大谷派 京都教区 教化広報誌

「教区だより」特別号 Vol.4

発行人 日野 隆文(真宗大谷派京都教務所長)

発行所 真宗大谷派京都教務所

〒600-8164 京都市下京区花屋町通烏丸西入

Tel: 075 (351) 5260 Fax: 075 (351) 5256

発行日 2020(令和2)年8月1日

メールアドレス: kyoto@higashihonganji.or.jp

ホームページ: http://www.k-kyoku.net/

